広 島 県 感 染 症 発 生 動 向 月 報

[広島県感染症予防研究調査会　感染症解析評価部会]
（平成１４年２月解析分）

１　疾患別定点情報

定点把握（週報）四類感染症　　平成14年1月分(12月31日～2月3日：5週間分)

疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去５年平均	発生記号	疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去５年平均	発生記号
1	インフルエンザ	2,928	4.92	15.04	↑	12	麻疹	3	0.01	0.05	
2	咽頭結膜熱	15	0.04	0.04	↓	13	流行性耳下腺炎	492	1.31	0.82	→
3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	282	0.75	－	↘	14	急性出血性結膜炎	10	0.10	0.03	
4	感染性胃腸炎	4,687	12.50	6.62	→	15	流行性角結膜炎	122	1.22	0.98	→
5	水痘	862	2.30	2.01	↘	16	急性脳炎	1	0.01	－	
6	手足口病	100	0.27	0.09	↘	17	細菌性髄膜炎	0	0.00	0.03	
7	伝染性紅斑	87	0.23	0.23	↗	18	無菌性髄膜炎	6	0.06	0.16	
8	突発性発疹	230	0.61	0.60	↘	19	マイコプラズマ肺炎	24	0.23	－	↘
9	百日咳	2	0.01	0.01		20	クラミジア肺炎	0	－	－	
10	風疹	1	0.00	0.19		21	成人麻疹	0	－	－	
11	ヘルパンギーナ	14	0.04	0.04	→						

※「過去５年平均」：過去５年間の同時期平均（定点当り）

急増減	増減	微増減	横ばい
↑	↗	↗	→
↓	↘	↘	
前月と比較しておおむね1:2以上の増減	前月と比較しておおむね1:1.5～2の増減	前月と比較しておおむね1:1.1～1.5の増減	殆ど増減なし（発生件数少数のものを含む）

※定点について

定点情報は，定点把握対象の四類感染症（週報対象 21 疾患，月報対象 7 疾患）について，県内 186 の定点医療機関からの報告を集計して作成しています。

	内科定点	小児科定点	眼科定点	STD 定点	基幹定点	合計
対象疾患 No.	1	1～13	14，15	22～25	16～21，26～28	
定点数	44	75	20	27	21	186

この情報は，「http://www.pref.hiroshima.jp/fukushi/kenkou/kansen/index.html」のホームページに掲載しています。
全国情報については，「http://idsc.nih.go.jp」に，インフルエンザホームページは「http://influenza-mhlw.sfc.wide.ad.jp」に掲載されています。

定点把握（月報）四類感染症　　平成14年1月分（1月1日～1月31日）

疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去５年平均	発生記号	疾患No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去５年平均	発生記号
22	性器クラミジア感染症	60	2.22	1.63	⇘	26	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染	136	6.48	－	⇨
23	性器ヘルペスウイルス感染症	9	0.33	0.44		27	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	64	3.05	－	⇗
24	尖圭コンジローム	10	0.37	0.24		28	薬剤耐性緑膿菌感染症	5	0.24	－	
25	淋菌感染症	28	1.04	0.96	⇨						

※「過去５年平均」：過去５年間の同時期平均（定点当り）

○ インフルエンザ　急増（１２月５４件⇒１月２，９２８件）
○ 咽頭結膜熱　急減（１２月４８件⇒１月１５件）

2　一類・二類・三類感染症及び全数把握四類感染症発生状況

○ 一類感染症　　発生なし
○ 二類感染症　　パラチフス１件発生（尾三地域保健所管内）
○ 三類感染症（腸管出血性大腸菌感染症）　　１件発生（Ｏ１５７　福山市）
○ 全数把握四類感染症　　４件発生（オウム病１件，急性ウイルス性肝炎２件（Ａ，Ｂ型），ジアルジア症１件）

3　今冬のインフルエンザの発生状況について

インフルエンザが流行しています。第５週（1月28日～2月3日）に，県全体で定点当たり12.84となり，流行発生注意報の基準値（定点当たり10）を超えています。今後の動向に注意が必要です。

1月分（12月31日～2月3日）の報告件数は，県内で2,928件，全国で122,401件と昨シーズンの1月（1月1日～1月28日，県内160件，全国9,850件）と比較して大幅に増加しています。

しかし，大流行した2年前の1月（1月3日～30日，県内11,096件，全国333,929件）と比較すると少なくなっています。

インフルエンザは，鼻汁，せき，のどの痛みなどの普通のかぜでも見られる症状のほかに，３９度以上の発熱，頭痛，筋肉痛などの全身の症状が強いのが特徴です。小児や高齢者では重症化することもあるので，注意が必要です。

次のことに気をつけて予防しましょう。

インフルエンザの予防対策

1　予防接種

○ワクチン接種により，インフルエンザにかかりにくくなり，かかっても症状が重くならないようにする効果があります。

2　日常生活における予防対策

○帰宅後の手洗い，うがいを励行する。
○外出の際は，マスクを着用し，人混みを避ける。
○室内は湿気をある程度保ち，時々室内の換気を行う。
○体力が低下しないよう，栄養，睡眠を十分にとり，適度な運動をする。

3　その他の留意事項

○インフルエンザかなと思ったら，早めに医療機関を受診し，適切な治療を受ける。
○病院や高齢者が入所している施設では，施設内の入院･入所者に感染させないように，職員や面会者は注意する。
○乳児等は，できるだけ，多数の人が集まる所には連れて行かないようにする。
○高齢者は発熱･頭痛などの症状があまり出ない場合もあるが，長引くと肺炎など重症になる可能性があるので，家族や周りの人も十分気をつける。

4　感染症情報

○オウム病　（全数把握四類感染症，診断した医師は７日以内に届出）

オウム病が1件発生しました。県内では感染症法施行（平成11年4月1日）後3件目の発生で，全国では同じく83件（11年24件，12年18件，13年30件，14年11件（2月3日現在）発生しています。

島根県の調査によると，今回の事例は，松江フォーゲルパークが関連した患者とのことです。

（原因）動物由来感染症の一つ（また人畜共通感染症の一つでもある）。
オウム病クラミジアに感染した鳥類の排泄物に含まれるクラミジア（病原体）を吸入して感染。また，口移しで餌を与えることによっても感染。

（症状）潜伏期間（1～2週間）を経た後の突然の発熱（38℃以上），インフルエンザ様（全身倦怠，頭痛，筋肉痛など）症状，重症化すると肺炎，呼吸困難など。

（注意すること）オウム，インコ，カナリヤ，ハトなどを飼育するときは，鳥かごを清潔にし，特に乾燥した糞は速やかに処理する。口移しで餌を与えない。
ペットの鳥類に異常があるときは，獣医師の診察を受ける。
医療機関を受診する際には，小鳥を飼育していることや鳥との接触について必ず申告する。

○感染性胃腸炎（定点把握四類感染症）

インフルエンザと並び冬期に多発する感染性胃腸炎は，いろいろな細菌あるいはウイルス等の病原体による嘔吐，下痢を主症状とした感染症の総称で，主として成人に流行する流行性ウイルス胃腸炎（カリシウイルス等が病原体），主として乳幼児に見られるロタウイルスによる乳児嘔吐下痢症やアデノウイルス胃腸炎などがあります。

1月の報告件数は，4,687件（定点当たり12.50）で，県全体としては流行発生警報開始基準値（定点当たり20）を下回っていますが，次の保健所では20を超えていますので，注意が必要です。
東広島地域（21.13），備北地域（21.65）

感染源は患者の糞便及び汚染された手指・食物です。感染経路としては，主に経口感染ですが，乳児嘔吐下痢症では，経鼻感染も，アデノウイルス胃腸炎では飛沫感染も想定されます。潜伏期間は，流行性ウイルス胃腸炎で1～2日，乳児嘔吐下痢症で48時間以内，アデノウイルス胃腸炎で約7日と言われています。

予防は，一般経口感染症の予防に準じて行います。

① 手洗いの励行
② 調理の際の十分な加熱
③ まな板，包丁，食器などについて熱湯で十分な消毒の実施
④ 調理後は速やかに食べ，保存する場合は，冷蔵庫に入れて低温にて保存
⑤ 過労を避け，体調を整える。

○ジアルジア症（ランブル鞭毛虫症）　（全数把握四類感染症，診断した医師は7日以内に届出）

ジアルジア症が1件発生しました。県内では感染症法施行後初めての発生で，全国では282件（11年48件，12年93件，13年135件，14年6件（2月3日現在））発生しています。

熱帯地方など海外で感染する人が多い感染症です。

（病原体，症状）ランブル鞭毛虫という原虫の栄養型虫体が十二指腸や小腸の粘膜に吸着寄生して，痢などを起こします。

（潜伏期間）1～3週間，またはそれ以上

（感染源）感染者の糞便

（参考図書　：　感染症予防必携（財）日本公衆衛生協会‘９９）